母親の教育水準と子供の病気のアセスメント

牛島光一

日本学術振興会 特別研究員（PD）

暫定版

2012 年 4 月 20 日

本研究の目的は 2002 年にタイで導入された 30 バーツ医療保障制度の特徴を利用し、教育水準の高い親ほど子供の病気を正確にアセスメント出来るかを調べることである。30 バーツ医療制度対象者は、制度導入以前は専門的な治療を受けるコストが高く独自の判断で病気の治療を行うことが（相対的に）多かったけれども、制度導入後は専門的な治療を受けるコストが劇的に下がったためにそれまでよりも病院で治療を受けられるようになった。結果として、制度導入後に観察される発病率は、制度導入以前に観察された発病率よりも、真の発病率に近づくと考えられる。一方で、親が子供の病気を正確にアセスメント出来ていなかったのならば、所得などの家計属性をコントロールしてもなお、制度導入前に観察される子供の発病率は制度導入後に観察される発病率から下方へ乖離すると考えられる。そこで、発病に関する客観的な指標として子供の入院に着目し、制度導入前後における子供の入院率の差と親の教育水準の関係を調べたところ、母親の教育水準が低いほど、子供の入院率の差が大きいことが分かった。特に、母親の教育水準が平均よりも低いグループでは、乳幼児期だけでなく小児期の子供の入院率の差が有意に大きくなる傾向がみられた。一方で父親の教育水準と子供の入院率の関係は有意ではなかった。この結果は乳幼児に対しては平均かそれ以下の教育水準で、小児に対しては平均未満の教育水準で母親が子供の病気を正確にアセスメントできていなかったことを示している。

Key Words: *子供への健康投資、親の教育水準と子供の健康、30 バーツ医療保障制度*

JEL classification: D1; H4; I1